THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA HISTORY RESEARCH GROUP

西宮歴史調査団ニュース　第５号

西宮市立郷土資料館　兵庫県西宮市川添町15番26号　〒662-0944　電話　0798-33-1298

赤くてかわいい竜吐水（竜吐水班中間報告）

衣笠周司（文・写真）　髙谷康彦（作図）　中田　昇（竜吐水解説）：竜吐水班

はじめに

「かわいい!」と皆が声を上げた。神戸女学院へ竜吐水の調査に訪れた時だった。それは赤くて小ぶりな女学生のようなポンプだった。

「竜吐水」とは江戸時代中頃から火災の消火に使われた手押しポンプのことで、竜吐水班は現存の竜吐水を求めて、市内各所を訪ね歩いている。

竜吐水班は2015年度からスタートし、まだ緒についたばかりだが、現時点での中間報告をする。

写真1　調査風景（神戸女学院）

１．竜吐水を訪ねて

調査に訪れた日程の順を追って概要を記す。カッコ内の日付は調査日。

①永福寺（下大市）　（写真・図は２ページ）

本堂軒下に吊して保存されているため、脚立に上りながら計測した。

本体正面に「龍吐水」、裏面に「村中安全」、右側面に「願主甲原元長」、左側面に「天保十二年寅二月吉日」の刻銘があり、上部ポンプ部分柱に「細工所／大坂阿ハざ戸屋町三丁目井上利兵衛」の焼印がある。（2015.11.10）

②淨橋寺（生瀬町）　（写真・図は２ページ）

竜吐水は、本堂軒下に吊して保存されているため調査に難渋し、精査を目指す野上千章班員も脚立上りに挑戦した。この日は同寺で防火訓練があり、女性の自衛消防隊員による放水が班員の目を引いた。

本体の正面に「生瀬村」、側面に「明治十五年七月新造之」「細工所／大坂四ツ橋西南詰南入　北村源兵衛」と焼印がある。

もう一方の側面に「大正九年十二月　中塚寅次良氏依　生瀬区購入所有処　昭和四十一年七月　中塚氏当山寄附保存者也」の墨書がある。（2016.1.17）

写真2　竜吐水（永福寺）

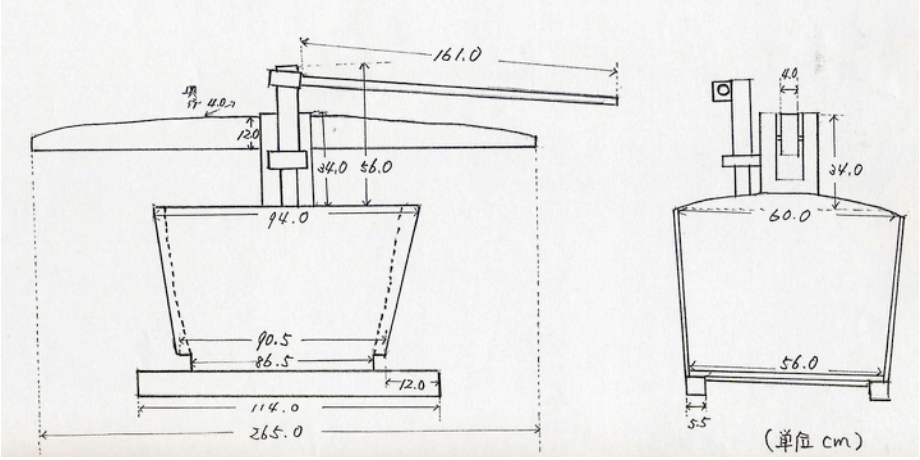

図1　竜吐水（永福寺）

写真3　竜吐水（淨橋寺）

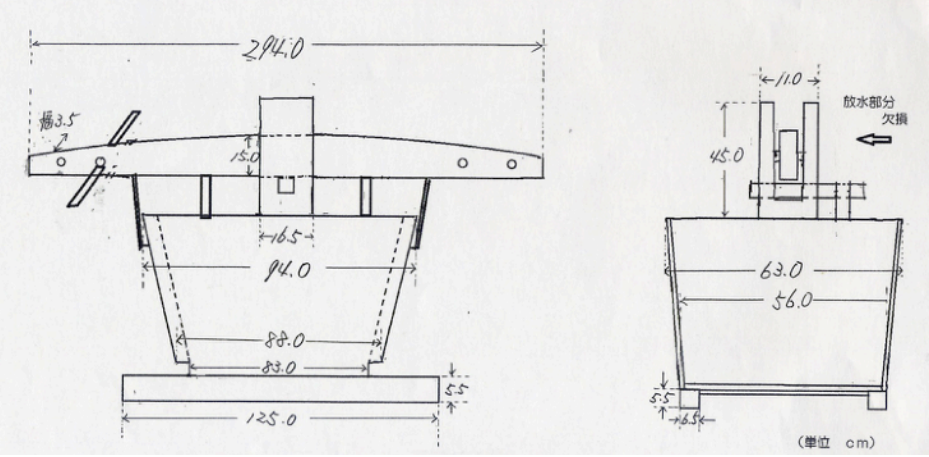

図2　竜吐水（淨橋寺）

写真4　竜吐水A
（山口町郷土資料館）

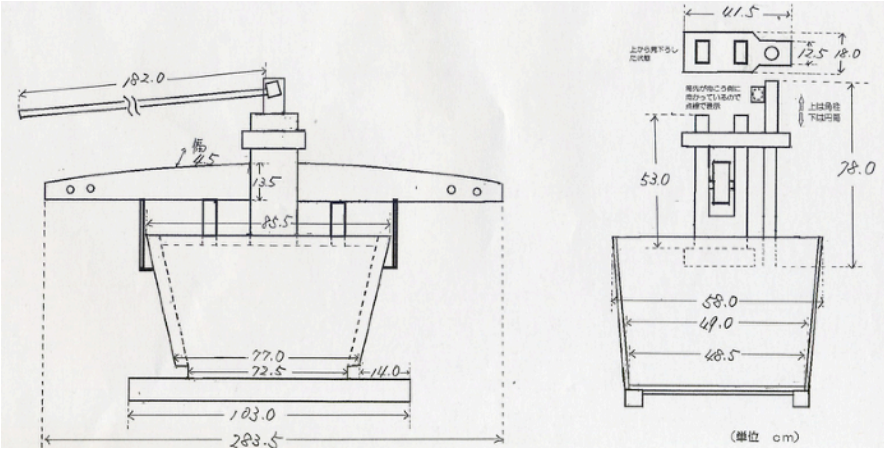

図3　竜吐水A
（山口町郷土資料館）

写真5　竜吐水B
（山口町郷土資料館）

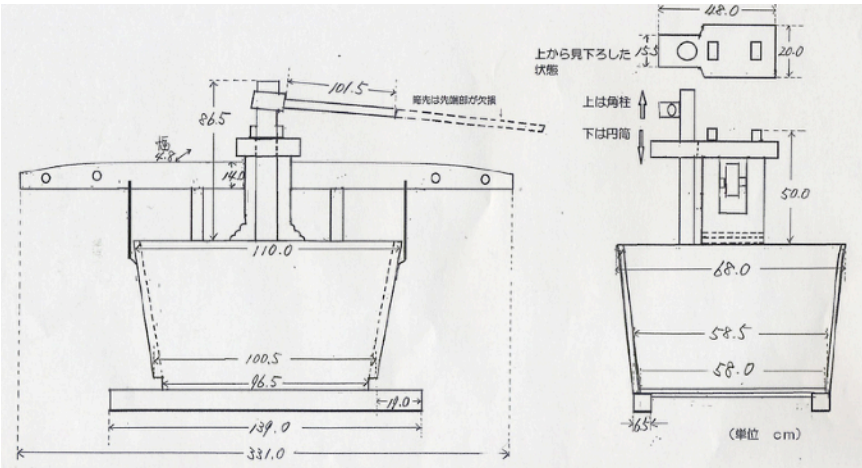

図4　竜吐水B（山口町郷土資料館）

③山□町郷土資料館（山口町）　2台　（A・Bとも、写真・図は３ページ）

１階と２階に分かれて展示されている。2基は同じ年の1カ月違いでの新調で、製造者は住所・氏名とも同じ。ここでも髙谷康彦班員の綿密な計測ぶりが見られた。（2016.3.8）

A（２階）　正面に「山口芝」、側面に「明治十八年酉七月新調」の墨書、同じく側面に「細工所／大坂阿ハざ上通二丁目井上利兵衛」などの焼印がある。

B（１階）　正面に「雲龍水」、裏に「中野村」、側面に「明治十八年酉八月新調」の刻銘、「免許」「細工所／大阪阿ハざ上通二丁目　井上利兵衛」などの焼印がある。

④明徳寺（山口町）　ここでも竜吐水は軒に吊されていた。場所は庫裏と門の間で、壁との隙間だけでなく、門との隙間も狭く、川上早苗班員や荒木知班員らが精査を試みたが、全方向からの計測や全体の写真撮影は無理だった。

本体の正面には四角形（山口の口か?）のなかに「山」の文字をデザインしたマークがつけられており、側面には「上山口村」の刻銘、「大阪釣鐘町二丁目　消防器械水弾　川邨卯兵衛製造」の焼印がある。

写真6　竜吐水（明徳寺）

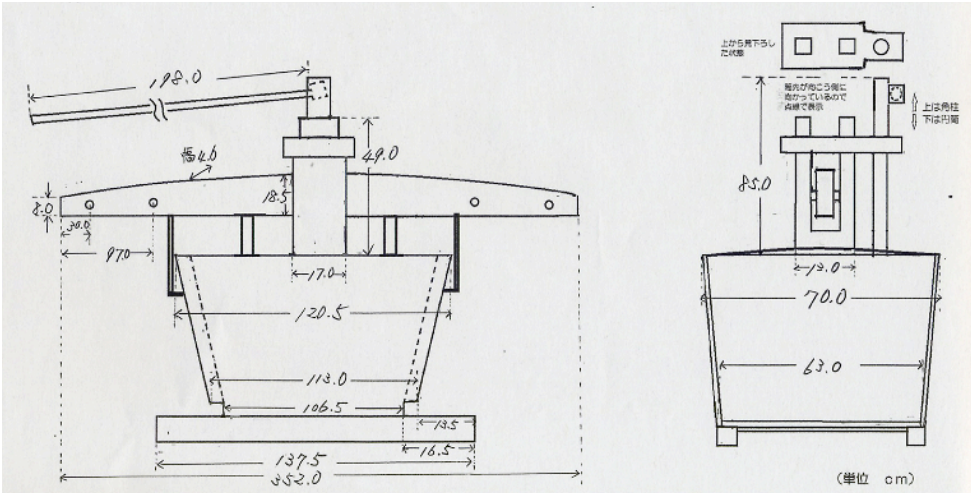

図5　竜吐水（明徳寺）

⑤神戸女学院(岡田山)

竜吐水という武骨な名前とは、およそそぐわない可愛らしいポンプだった。

調査した他の竜吐水は木製だったが、これは一部を除き金属製で赤く塗られた小型のものだった。鉄製車輪が付いた台車に乗せられており移動が可能。ポンプの腕木部分も高橋博己班員と中田昇班員とで実際に操作してみることができた。

本体の側面に「神戸女学院高等女学部」と表示。下方の両側に丸い穴があり、それぞれ「吸水」「放水」と記されている。年代は不明。（2016.6.14）

写真7　消防ポンプ（神戸女学院）

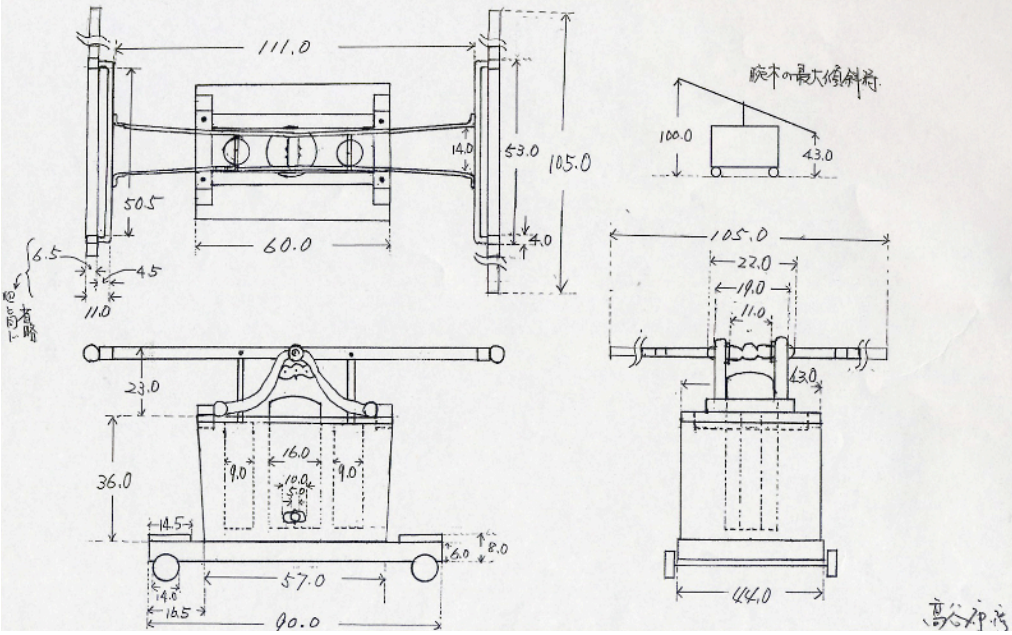

図6　消防ポンプ（神戸女学院大学）

⑥西宮市立郷土資料館(川添町)　2台

館蔵されていた竜吐水は2基。ほかに水鉄砲型の手押しポンプも多数保存されている。高橋誠八班員、益田健司班員らも加担して、竜吐水を収蔵庫から担ぎ出したが、相当な重量があり、当時の火災出動時は大変だったと思われる。

（2016.7.9）※紙面の都合により、寸法図は割愛した。

A（収蔵№2574）

今津の福應神社からの寄託。本体に「池田」の刻銘、反対側の面には「路」を図案化して山形マークを付した表示がある。

B（収蔵№2820）

甲子園口の加島貞二氏寄贈。本体に「加嶋」の刻銘があり、反対側の面には「セ」にカギ型マークの飾り文字、「丸に三つ引き」の紋がある。側面に「己明治二年巳八月吉日」の刻銘と「御免/日本橋平松町　龍吐水師　富田平吉」「元祖／雲龍水」の焼印がある。

写真8　竜吐水A（郷土資料館）

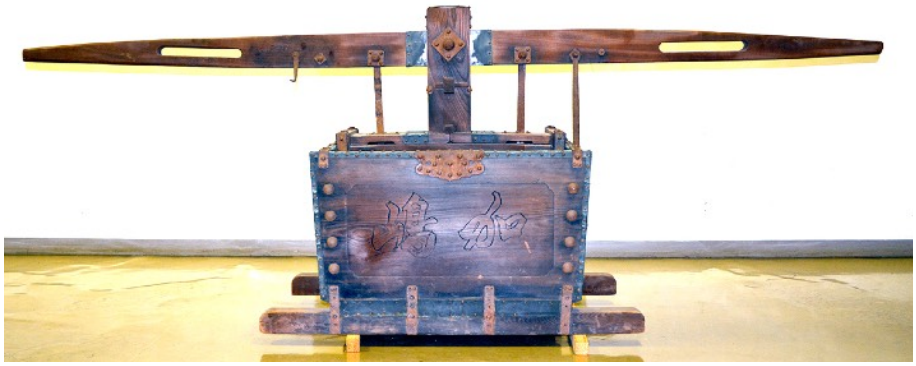

写真9　竜吐水B（郷土資料館）

２．竜吐水のはじまりは？（西宮歴史調査団通信　10月号　中田昇寄稿より抜粋）

竜吐水は、江戸時代の中ごろ、オランダからもたらされた。竜吐水という名称は、竜が水神として水に深く関わることによる。

日本における消防活動の歴史は、江戸時代初期までは消防組織も存在せず、火事になれば、大量の放水をする術はなく、火勢が静まるのを待つだけだった。江戸においては、明暦3年（1657）の大火（振袖火事）以降に防火対策がとられ、防火帯・避難所となる場所が設置され、大名火消しが誕生する。その後、正徳5年（1715）に町火消しが誕生し、明和元年（1764）に竜吐水が配備された。

その後、竜吐水は明治時代末ごろまで使用されたようである。

３．古式の消防機材・道具など

西宮市内の消防署と消防分団を順次訪れて、保存されている装束、団旗などの用具や火の見櫓の確認を行っている。現在までに訪問した分団での所蔵状況を中間報告する。日付は訪問日。

①瓦木消防署

署の玄関を入ってすぐ左側に展示コーナーがある。高木分団、瓦木分団、今津分団などから寄贈された団旗、半鐘、法被、猫頭巾、鳶口などが収蔵されている。

中でも、火災信号の鳴らし方（半鐘、サイレン）を表示した琺瑯板が異彩を放っていた。（2015.11.10）

写真10　半鐘（瓦木消防署）

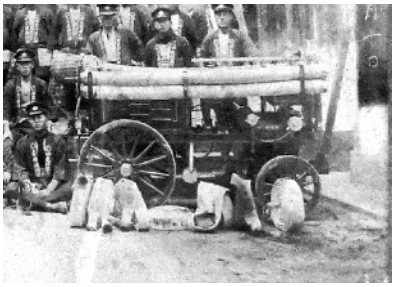

写真11　昭和７年の写真に写る消防ポンプ（上ヶ原分団）

写真12　分団名が入った提灯（上大市分団）

②上ヶ原分団

昭和7年の消防団員集合写真があった。写真に写っている幟には「甲東村上ケ原第六部消防組」と染め抜かれていた。(2015.11.10)

③上大市分団

火の見櫓が残っていたが、半鐘はなく、スピーカーが備え付けられていた。提灯も所蔵。（2015.11.11）

④段上分団

火の見櫓があり、半鐘も残っている。法被、提灯なども所蔵されている。2016年に分団器具庫が建て替えられた。（2015.11.10）

写真13　火の見櫓（段上分団）

⑤神呪分団

新幹線建設の際に、車庫・火の見櫓とも移設された。視界を確保するため、火の見櫓と車庫は離れて設置された。以前に火の見櫓があった場所は、やくじんさん筋の入口で、基礎のコンクリートが残されている。火の見櫓には、半鐘とサイレンが一緒に設置されている。分団名が入った古い提灯あり。（2015.11.1）

写真14　かつての火の見櫓の基礎（神呪分団）

⑥門戸分団

火の見櫓あり。半鐘なし。「甲東第二分団」の団旗、提灯などがあった。（2015.11.10）

⑦船坂分団

火の見櫓に半鐘が取り付けられている。「山口村第五部」の団旗。拍子木、法被、手回しサイレン、振鈴、掛け矢などがあった。（2016.3.8）

写真15　分団旗（門戸分団）

⑧上山口分団

刺子半纏、半纏、法被、頭巾、股引、各種帽子、鳶口などが、地区会館の玄関のガラスケースの中に入れて展示保存されていた。（2016.3.8）

⑨下山口分団

纏が保存されていた。上部に「山」「消」の文字が見え、馬簾の内部に鈴が2つ付けられている。火の見櫓はあるが近年に更新され、半鐘は下ろして保存されている。（2016.3.8）

⑩下大市分団

纏があり、上部に「甲東」「三」「部」の文字が記される。手回しサイレン、法被、提灯があった。（2016.6.14）

写真16　半鐘
（船坂分団）

写真17　装束
（上山口分団）

写真18　半鐘
（下山口分団）

写真19　纏
（下大市分団）

４．今後の活動方針

今後は、未訪問の消防分団も訪れ、火の見櫓や保存された機材などを確認、記録作成、聞き取りを進めたい。さらに安全遺産の視点からの研鑽にも励みたい。

なお、調査・検討が進んだ段階で、この報告の一部変更、修正が入る可能性もある。ご了承いただきたい。

◆竜吐水班　班員名簿（平成２７～２８年度）◆　☆２７年度のみ　★２８年度のみ

荒木　知、川上早苗、衣笠周司、髙谷康彦、高橋誠八★、高橋博己★

多々良さゆり☆、中田　昇★、野上千章、益田健司★